国語

（解答番号 1 ～ 37）

第1問

次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(設問の都合で本文の段落に 1 ～ 12 の番号を付してある。)

(配点　50)

1 ヴァーチャル・リアリティ(注1)を問題にしたSF映画に『マトリックス』(注2)がある。主人公は平凡な日常の中で、突然見知らぬ者たちからアクセスされる。彼らに従って、真実に目覚めるというピル(注3)を飲むと、この現実と思われていたものすべてが、コンピュータによって巧みに上演された幻想に過ぎず、実際には人間は、巨大コンピュータに神経を接続されたまま、水槽の中で眠らされてその幻想を夢見ているにすぎなかった事がわかる。真実に目覚めた少数の人間たちが、このコンピュータの支配に闘いを(ア)イドんでいるわけである。

2 ここで面白いのは、彼らの闘いの眼目が夢見る人間たちを覚醒させることにある以上、外からコンピュータを破壊するようなことが問題ではなく、コンピュータの回路(マトリックスと呼ばれる)の中に入り込んで――という事は各人の夢の中に入り込んで、その意識に働きかけねばならないという点である。そのため彼らは様々の危険を冒して、さながらコンピュータウィルスのように回路に侵入し、なお夢に固執している人々に覚醒を(イ)ウナガさねばならない。他方コンピュータの方では、それに対抗する免疫機構のようなものを自らの中に作り出し、彼らをツイ(ウ)キュウし撃破しようとするわけだ。

3 ここで、リアルな世界とヴァーチャルな世界を本当に区別するものがいったい何か、という問題が生じる。コンピュータと闘う人間が、コンピュータにつながって夢を見ている人間と違って現実に触れていると思えるのは、彼らがヴァーチャルな世界をいわば巨大なテクスト(注4)とみなし、その任意の場所に「外」から侵入することができるからである。彼らの侵入は、テクストを切ったりつないだりする解釈的介入に他ならない。つまり彼らにとって、この日常世界は一つの夢というテクストであり、その意味を支配する A 魔法にかけられているようなものだ。この魔法は解かれねばならぬもの、少なくとも別の魔法によって別の意味を帯び得るもの、つまりは解釈によってまったく別様の読解も可能なものなのだ。

4 実在と意味をぴったりと一体化したように見ている人にとっては、すべては議論の余地なく明瞭なものに見える。『マクベス』(注5)にあるように、「きれいが汚い、汚いがきれい」となることもないし、ハムレット(注6)が言うように、ラクダに見える雲が時にはイタチにも、またクジラにも見えるということもない。しかしそれは単に、彼が支配的解釈の魔法(イデオロギー)に完全に捕らえられているからにすぎない。しかし「たがが外れた世界」においては、ネズミが王になったり、道化が知者になったりするのである。だから「この世界」の実在を固く信じる人々がコンピュータの夢のド(エ)レイでしかないのに対して、それを一つのテクストにすぎないと見ることのできる者だけが、つかのま真実に触れる自由を得るわけだ。

5 すると、現実の世界への覚醒と見えたものは、結局「この世界」(ヴァーチャルな世界)への解釈的介入がもたらした効果(仮象)に過ぎないと言えるのではないか? つまり、ヴァーチャルな世界を離れて、そこへと覚醒すべき確固とした現実があるわけではないのだ。むしろこの世界を現実そのものと固く信じて疑わない態度そのものが、あらゆる幻想の実体とも言えよう。それが証拠に、コンピュータの夢から覚醒した者も、それがもう一つの夢でないという確証は、それだけでは得られないだろう。我々の経験の中には、これこそが疑いもなく現実の経験だという確証を与えてくれるようなものは、何一つないのである。それゆえ、回路に侵入してイデオロギー闘争を闘う者たちも、自らの確信を正当化できる絶対の合理的根拠が欠けており、そのため夢の中にまどろむ人々への説得も、単に理性的ではあり得ない。むしろ、この確信はいったん疑い始めると、いたって脆いものだということがわかる。確信に基づく次なる行動と決断のみが、そのつど更なる確信を生み出すのであり、逆にいったん受動的に証拠をかぞえ始めると、たちまちすべては夢と区別がつかなくなってくるだろう。「十分な理由」はどこにもない。**B** あらゆる理由は不十分であり、あらゆる推論は決断である。

6 実は、映画の主人公がピルを飲むとき、赤いピルと青いピルが目の前に示される。青いピルを飲めば、これまでどおりの生活にそのまま戻れるが、赤いピルを飲めば真実を知ることになると言われるのだ。果たして赤いピルが本当に真実を知らせるものなのか、なんら理性的説得はない。ただ決断が求められるのである。これは宗教的決断のようなものである。信じる決断をした人にだけ見えてくる「真実」があるのだが、決断に先立ってそれは知られ得ない。コンピュータ回路の中での説得は、こ

のように宗教的決断への誘惑に似ている。

7 それを悪魔の誘惑(試み)と区別するものはいったい何か？　これは難しい問題だが、おそらく決断の有無ということ自体が、二つを分けるのであろう。つまり、悪魔の誘惑に乗ることは、一見すれば決断のように見えるものの、実はなんら決断ではなく、従来のイデオロギー(夢)への復帰でしかないのに対し、「真実」への決断の真実性は、それが本当の決断である点にある。

8 「決断」については、誤解されていることが多い。AかBか(Aか非Aか)いずれも決断し得るものと思われよう。しかし、本当はいずれか一方だけが本当の決断であり得、他方は単に決断の回避でしかないのだ(両方が決断の回避である場合もある)。一九一八年レーニン(注7)は対独戦争の単独即時(オ)テイセンを決断した(ブレスト＝リトフスク講和)。この決断に反対していた他のボルシェヴィキ(注8)たちの主張は、一見すると別の選択肢のように見えるが、実際には単に決断の回避でしかなかった。**C** 決断とは、それが為されてみて初めて、実際にはそれ以外の決断があり得なかった事が認識されるようなものなのだ。これが決断の事後的効果である。認識はおしなべて決断の事後的効果としてのみ与えられるのであり、決断を回避する者には決して与えられない。決断を回避するという誤った「決断」をした者たちにとって、事態は相変わらずあいまいなまま仮象の可能性を帯びたままであり、己れの不決断の本質が見えないのに対し、決断した者のみが事後的に己れの決断の真の意味を認識するのだ。幾何学(注9)の証明において、適切な補助線は、それが引かれてみて初めて適切なものだったことがわかるようなものである。

9 かくて決断した人間のみが現実に直面する。それ以外の者は、ただイデオロギーの水槽の中で相変わらず夢を見ているだけなのだ。言い換えれば現実とは、ただ決断の瞬間にだけひらめき現れるもの、ある魔法からもう一つの魔法への転換の一瞬にだけ輝く自由に対して、ほの白く浮かび上がるものなのである。

10 このように、我々のリアリティを支えているものが実際には理性ではなく信仰であり、信仰への決断であるということは、我々にめまいのような感覚を与えるかもしれない。**D** 我々の決断は、事前に何のよりどころも与えられていない盲目の飛躍であらざるを得ないのだろうか？

11 理性的・理論的には確かにそう言うしかあるまい。しかし『マトリックス』は、それ以外の支えを用意している。それは信仰のひな形（マトリックス）とも呼ぶべきものである。主人公は、「コンピュータとの闘争のために選ばれた救世主がいつか現れる」という「預言」（注10）によって呼びかけられている。本人にも周りの人間にも、彼こそがその者であるという確証は与えられないが、この呼びかけを自分へのメッセージとして受け取り始めるにつれて、この問いかけが次第に確信へと変化し、そのことが彼を実際に救世主へと導き始める。そしてついに、「奇跡」はピエタ（注11）の形象（マトリックス）の中に受胎するのである。

12 我々には、はっきりした根拠は相変わらず与えられていないが、にもかかわらずこのように未来への行動のひな形のようなものが、いくつか与えられているのである。愛とか自由とか正義……これらは、それを信じることによってしか、その中へと我々を招じ入れることはない。我々がそれらを理解するには、根拠も支えもないまま前のめりにそこへと半ば身をゆだねなければならず、もはや何の支えもなく空間へと身を投げ出した瞬間――そのとき初めて、我々が信じることによって分かち与えた力が、中空に浮いた我々の足場を支えるために、熾天使（注12）のようにはせ参じるであろう。かくして我々はかろうじて踏みこたえ、暗闇（くらやみ）に崩落することを免れるわけである。このような不安に耐えかねて、何らかの理論とか組織とか、財産や前例に支えを求めても、結局は無駄だろう。その意味で、我々の自由は信仰の中にしかなく、我々の信仰は自由の中にしかないのである。

（田島正樹（たじまま さき）『正義の哲学』による）

（注）1 ヴァーチャル・リアリティ――仮想現実。一般的には電子メディアなどによって作り出される、実在の世界であるかのように知覚、認識される虚構のイメージのありよう。

2 マトリックス――一九九九年公開のアメリカ映画のタイトル。英語の「マトリックス」という語には、ものを生み出す母体、基盤、母型といった意味がある。

3 ピル――丸薬、錠剤。

4　テクスト――原文、本文を意味するフランス語に由来する学術用語。一定の規則に従い、意味を生み出す記号の集まりのこと。

5　マクベス――シェークスピア（一五六四～一六一六）作の戯曲の一つ。「きれいが汚い、汚いがきれい」は、作中に現れる魔女たちの言葉を踏まえる。

6　ハムレット――シェークスピア作の戯曲『ハムレット』の主人公であるデンマークの王子。「ラクダに見える雲が……またクジラにも見える」は、作中のハムレットの言葉を踏まえる。

7　レーニン――一八七〇年～一九二四年。一九一七年に実現したロシア革命の指導者。

8　ボルシェヴィキ――現在は「ボリシェヴィキ」が一般的。ロシア帝国における革命勢力であった社会民主労働党の分裂に際して、レーニンが率いた急進派のこと。また、そのメンバー。ロシア革命の結果、政権を獲得した。

9　幾何学――数学の部門の一つ。図形や空間を対象とする。

10　預言――キリスト教などにおける、神から託された言葉。

11　ピエタ――聖母マリアが、処刑されたキリストをひざに抱えて嘆いている姿を表した図像のこと。

12　熾天使――『旧約聖書』に登場し、以後のキリスト教的世界において天使の位階の最高位にあるとされた。六枚の翼をもち、天空で神の玉座を守護する。

問1 傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 1 ～ 5 。

(ア) イドんで 1

① 世のフウチョウを憂える
② 高原のセイチョウな空気
③ チョウバツを加える
④ 不吉なことが起きるゼンチョウ
⑤ 対戦相手をチョウハツする

(イ) ウナガさ 2

① 対応がセッソクに過ぎる
② スイソクの域を出ない
③ 原稿をサイソクされる
④ 体育でソクテンを練習する
⑤ ショウソクを尋ねる

(ウ) ツイキュウ 3

① 庭にキュウコンを植える
② においをキュウチャクさせる
③ 不安が全体にハキュウする
④ フキュウの名作を読む
⑤ 会議がフンキュウする

(エ) ドレイ 4

① ヒレイな行為をとがめる
② レイミョウな響きに包まれる
③ 安全運転をレイコウする
④ バレイを重ねる
⑤ 封建領主にレイゾクする

(オ) テイセン 5

① 記念品をシンテイする
② 条約をテイケツする
③ 梅雨前線がテイタイする
④ 国際平和をテイショウする
⑤ 敵の動向をテイサツする

問2 傍線部A「魔法にかけられているようなものだ」とあるが、これはだれのどのような状態をたとえたものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6 。

① 真実の存在を認めていない多くの人間たちが、自分たちにとって現実のように見える世界も、実は見方によってさまざまに変わる幻想にすぎないと思っている状態。

② 真実の存在に気づきかけている大方の人間たちが、現実の世界とはどういうものかを考える機会を奪われ、出口の見えない夢の世界に閉じ込められている状態。

③ 真実を求める少なからぬ人間たちが、この日常世界こそが唯一の現実であると知りながら、どこかに自分の理想とする世界が存在することを願い続けている状態。

④ 真実の存在に恐れを抱く一般の人間たちが、現実を夢と区別せず、自分たちが生きている日常世界を夢というテクストだと信じ続けている状態。

⑤ 真実に目覚めていない多数の人間たちが、確固たる現実があることを信じ、しかもそれが自分の目の前にある日常世界だけであると思い込んでいる状態。

問3　傍線部B「あらゆる理由は不十分であり、あらゆる推論は決断である。」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7 。

① 我々は、みずからの経験が現実のものであると言える理由をそもそも合理的には示しきれないので、理性的になされるべき推論も絶対的な根拠を持たないことになるから。

② 我々は、ヴァーチャルな世界が現実化することを肯定する十分な理由を持たないので、幻想からの覚醒を目指すどんな推論も幻想を証拠にするしかなくなるから。

③ 我々は、目の前の世界が現実であることを証明する際、合理的な理由づけよりも経験上の直感を優先するので、推論を支える根拠も実は個々の主観に過ぎなくなるから。

④ 我々は、みずからの経験が単なる夢であると断言できる真の理由がつかめないので、理論的に構築された推論も受動的に数え上げた証拠に基づくことになるから。

⑤ 我々は、正当な理由がないにもかかわらず、周囲から求められるままに行動を起こすしかないので、いかなる推論も十分な現実の裏づけを持ちえなくなるから。

問4 傍線部C「決断とは、それが為されてみて初めて、実際にはそれ以外の決断があり得なかった事が認識されるようなものなのだ。」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **8** 。

① 決断とは「AかBか(Aか非Aか)」のうち正しい方を選択する行為であると思われているが、決断を回避したかのようなボルシェヴィキたちの政治的行為もまた正しい選択であったことが後になって明らかになるということ。

② 「AかBか(Aか非Aか)」の選択を回避したとしても、事態が相変わらず仮象の世界にとどまっているという意味でそれは正しい選択であり、その結果決断しなかった行為の正当性が後になって明らかになるということ。

③ 「AかBか(Aか非Aか)」の選択をした者たちにとって、補助線を引いて初めて幾何学の正解が得られるように、決断の結果仮象世界のリアリティが立証されることによってその決断の有効性が後になって明らかになるということ。

④ 決断とは一見「AかBか(Aか非Aか)」をみずから選択する行為のように思われているが、真実への決断という確信があれば、悪魔の誘惑に乗った選択さえもひとつの決断であることが後になって明らかになるということ。

⑤ 決断とは「AかBか(Aか非Aか)」を選択する行為のように思われているが、その選択自体は見せかけの決断でしかなく、真の決断を回避しなかったことによってのみ自己の行為の意味が後になって明らかになるということ。

問5 傍線部D「我々の決断は、事前に何のよりどころも与えられていない盲目の飛躍であらざるを得ないのだろうか?」とあるが、これを受けて、第11段落以降どのように論じているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **9** 。

① 決断には、神や巨大コンピュータのような揺るぎないものの支えも必要であり、愛や自由といった信念に基づく我々の判断は個人を超えた大いなるものによって受け止められるという形で、人間の決断における超越者の不可欠性について論じている。

② 決断とは、個人の判断に基づくものではなく、「預言」によって呼び出された救世主がもたらすものであり、それが信じられず財産や前例に心の支えを求めた者は暗闇に落ちることになるという形で、決断することと救済との因果関係について論じている。

③ 決断には、理屈では説明できないことをあえて信じて未来への最初の一歩を踏み出す勇気が必要であり、それが真の決断であったならば必ず未来につながる足場が与えられるはずだという形で、決断することと信じることとの不可分性について論じている。

④ 決断とは、未来に対する、理論とは関係のない無根拠な確信に基づいてなされるものであり、自分こそが選ばれた救世主であるという不動の信念を持って行動すれば必ず未来は開かれるという形で、決断を行う者の本質的な楽観主義について論じている。

⑤ 決断には、愛や正義に深く根ざした情熱的な態度が必要であり、その態度に対する確固たる信念さえあれば具体的な根拠はなくても周囲の人々に受け入れられるという形で、決断することと他者と共に生きることとの密接な関連について論じている。

問6　この文章の表現に関する説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 10 ・ 11 。

① 「この現実」(第1段落)「この日常世界」(第3段落)「この世界」(第4段落)における「この」という語は、文脈上の特定個所を指示するのではなく、まさに〝今・ここ〟の、という意味で、それぞれの被修飾語を強調する働きをしている。

② 「現実」と「真実」という二つの語は類義語であり、対象のとらえ方が客観的か主観的かという違いがあるが、この文章では、主観と客観は区別できないことを示すために、互いに置き換え可能な用い方がされている。

③ 第5段落には、「すると」「つまり」「むしろ」などの接続詞が続けて現れているが、それは他の段落よりも論理展開を明確にするためであり、この段落を境として話題の中心が移行することに対応している。

④ 第8段落末尾の「幾何学の証明において、適切な補助線は、それが引かれてみて初めて適切なものだったことがわかるようなものである。」という比喩(ひゆ)表現は、決断が人生の謎(なぞ)を解く手がかりであることを逆説的に説明している。

⑤ 「いったい何か」という疑問表現が第3段落と第7段落のそれぞれの冒頭文に見られるが、この表現はどちらも段落冒頭にテーマがあることを示し、答えとなる説明が同じ段落の中に出てくることを予告している。

⑥ 「マトリックス」という同一の語が、第2段落では「コンピュータの回路」の呼称として、第11段落では「ひな形」や「形象」という別々の語に対する振り仮名としても用いられていることは、文章全体の論旨の一貫性に見合っている。

第2問 次の文章は、高見順の小説「午後」の全文である。これを読んで、後の問い(**問1**〜**6**)に答えよ。なお、本文の上の数字は行数を示す。(配点 50)

彼は、子供が可愛くて、しようがなかった。彼は三十四歳で、子供は二歳(注1)の女児である。

二階で仕事をしていても、階下で子供の声がすると、降りて行ってあやしたくなる。彼はソワソワして了うのだった。彼の仕事というのは、文筆の仕事であった。我慢して、仕事をしているが、程なくたまりかねて、階下へ行く。

「由紀やッ!」

そういう名前である。

「パパ」

由紀子が彼を見て、ニッコリ笑ったりしたら、もういけない。彼は傍へ飛んで行って、

「こいつ!」

たまらなく可愛くて、だから乱暴に抱き上げ、抱きしめる。ちょっと非理性的な愛情だなと彼は思わないではないが、どうもしようがないのである。固より頑是ない由紀子は、乱暴で我儘な父親の愛撫に、——毎度のことだが、やはり吃驚して、

「イヤ、イヤ」

と藻掻き、そして泣いたりすることもある。

大体こんな工合に、彼はよく子供を泣かせる。自然、子供は父親になつかない。幾分嫌っている気味もある。

——そんな乱暴な真似をしない場合だってある。

「ユーキコちゃん」

自分を殺したそんな猫撫声を出して、彼の妻か母親が遊んでやっているのの、仲間入りをする。

「ユーキコちゃん。は、ーいと言わないの」

「はーい」
「よし、よし」
彼は(ア)悦に入って自分の顎を掻く。
「おい、お茶を入れてくれ」
と妻に言う。妻は、
「ひと休みなさるんですか」
と彼に言う。
「う、うん」
曖昧に返事すると、
「由紀子ちゃん、パパにお願いして、おんもにあんあんあんに連れて行っていただいたらどう」
「あんあんあん」
と身体を振る。匍うことは達者だが、まだ歩けない。これを抱いて外を歩くと、子供は、歩く調子に合わせて、あんあんあんと身体を振るのである。
たまには、好きな外へ連れて行ってやったらどうですか、と妻は暗に彼に言っているのである。
「よそさまのお父うさまのように——」
と、いつか彼に言ったこともある。
「う、うん」
彼は曖昧な声を出す。
そんな暇はない。ちょっと子供を見に来たのだ。早く机に戻らなくてはならない。**A**彼は階下に来た自分をいまいましく思っている。

暇がないのは、うそではない、その時は。彼が家にいるときは、いつも仕事に追われているときだからである。実際にというより、いわば気分的に。だが、しかし、いつも年柄年中仕事に追われている訳では決してない。仕事から解放された暇なときは、外へ出て行く。その方が時間的には多い。そんな時に、子供をゆっくり可愛がってやればいいのである。だのに、仕事から解放されると、仕事部屋にいたたまれない気持で、外へ出て行く。——

「はい、お茶」

「由紀子も飲むかい。由紀子は番茶でないと駄目だね」

ひとりで、さっさと飲んで、

「さて」

もう立ち上って、

「さアて、仕事だ」

あんあんあんと言いつづけている由紀子を置いて、匆惶(注2)として二階へ行く。

つまり、乱暴でなければ、我儘な父親であった。で、——いや、それはそれとして、つまりそんな彼であった。

そんな彼の、ある日の話である。とある文学的な会合があって、その帰りに、とある女流作家と一緒になった。

「赤ちゃん、いかが。可愛くおなりでしょうね」

「ええ、とても……」

と彼は(イ)相好を崩していた。作品を面と向って褒められると、

「いや、ダメですよ」

と心底から恥しがるのであるが、子供は、人から可愛いと褒められると、素直にうれしがる彼であった。その親馬鹿(注3)チャンリンを、彼は自分で、それでいい、それがいいのだと思っている。素直なところの、少しどうも無い自分だと思っているからである。そんな自分を子供が救ってくれるかもしれない……。

「子供の可愛さというのは、かなわんですな」
と彼は女流作家に言った。
「他の何にたとえようとしても、たとえられないものですね」
その女流作家には、女学校(注4)に行っているお嬢さんがあった。それが長女で、下に男の子もいる。良人(注5)は、とある会社の重役で、彼女は今は隠退したとある高官の娘である。そうした階級の人らしく、女流作家は慎しみぶかくおだやかに微笑している。

B「子供を持って僕は、今まで知らなかった感情を知らされた。痒くても掻けないところを掻かれるみたいですね」

たとえられないものだと言いながら、図に乗って、そんなことを言った。
会は昼食を共にする会で、終ったのは三時前であった。駅へ行き、鎌倉にいる女流作家は汽車の方なので、そこで別れた。彼は省線(注6)である。
省線の歩廊(注7)に、学校帰りの女学生がかたまっていた。輪を成して、無邪気に笑い興じている。彼はそれを見て、向うの歩廊にいる女流作家のお嬢さんは、この年頃なのだなと思った。同時に、そのお嬢さんのことについて、その女流作家と親しいとある作家から聞いた話を、思い出していた。
同じ鎌倉にいるその作家と、女流作家とが、鎌倉行きの電車に乗り合わせていた。その同じ車へ、女学生のお嬢さんが友だちと一緒に入ってきた。無邪気に笑い興じながら。
作家はお嬢さんを知っていた。
「あすこへ、お嬢さん(注8)が……」
と女流作家に言った。
彼女が振り向いたとき、お嬢さんの方も、こっちに気付いて、――その瞬間、作家は、まるで予期しないそのお嬢さんの表情を眼にしたのだった。妙な、――羞恥の表情なのだ。そして羞恥を子供心に抑え隠している表情。
お嬢さんは、あわてて、ぷいと顔をそむけた。こっちに背を向けた。まわりの友達に、母親と眼を合わせたことを気付かれま

いとしているようだった。
でも、友だちは気付いていて、
「だーれ？」
と聞いている風で、こっちへチラチラと視線をやるのだ。お嬢さんは、頑なに背を見せたままで、その恰好は、
「あの方、ちょっと知った方なのよ」
とでも言っているのではないかと思われる、(ウ)すげなさであった。
作家は妙な気がした。
「変なものね」
とそのお嬢さんのお母さんの女流作家は言ったそうである。
「娘は、外であたしに会うと、いつもああなんですよ。母親を友だちに見せるのが恥しいのね」
——彼は、その話をその作家から聞いたとき、
「俺も、中学生なんかの時分そうだった」
と思った。軽くそう思っただけだった。その頃、彼にはまだ子供がなかった。
いま、その話を改めて思い出したのである。彼は向うの歩廊にいる、美しく上品な夫人の女流作家に眼をやりながら、
「俺が、俺の母親を何か恥しく思ったのは、母親は無学で無智で人前に出せないといった、今おもえば、全くもって罰当りの俺の虚栄心からだった。だが、あの人は、——娘さんにしてみれば、友だちに大いに自慢していい母親だ。綺麗だし立派だし……。普通のお母さんより捌けてもいるし、物分りもいいし……だのに」
と心の中で呟くのだった。
「どういうんだろう。あの人自身も、女学生時分そうだったのかしら。その辺のことを、さっきあの人に聞いてみればよかった。——お母さんが、普通のお母さんとちがって、女流作家というのが、娘さんにとって、なになのかしら。それとも、娘に有

りがちな心理なのかしら」

待てよ、由紀子も……と彼の思いは内に向けられてきた。由紀子もやがて……。いや、由紀子の場合は、父親を恥しがるかもしれない。今は、一緒に外へ出たいとせがむが、そのうち物心がつくと……。

「いや、それより……」

C 彼の思いは、彼の年老いた母親の上に向けられた。彼は今まで、ついぞ一度も母親と一緒に外へ出たことはないのだった。今は、固よりもう罰当りの虚栄心は無いが。

「俺は全く親不孝ものだ。そして子供にだって、可愛い可愛いと自己満足をしているだけで、なんという父親であるか」

彼は悄気た。

家へ帰ったらすぐ、明日天気がよかったら、みんなで動物園へ行こう、そう言おうと思って、家の垣根の前まで来て、彼は、なんとなく垣根越しに、なかをのぞいてみた。

縁側に座蒲団を出して、彼の母親と妻が斜めに向い合ってちんと坐っていた。縁側には、珍しく暖かい冬の午後の陽がさしこんでいる。由紀子は、彼の母親の背中におんぶしていた。ねんねこ(注9)にくるまって、うそのように小さかった。

「うむ」と彼は頷いた。

妻は編物をしている。由紀子のセーターである。

母親は、膝にのせた毛糸の玉の上に両手を重ねて、——見ると、居眠りをしている。快さそうに、こっくりこっくりとやっている。上体が前にのめるたびに、背中の由紀子も、こっくり、——一緒に居眠りをしているのだが、一緒にがくッとなりながら、眼をさまさない。すっかり安心している感じで、寝ているのである。

D 家の平和が、彼には何か哀しい位だった。

（注）

1　二歳――数え年で二歳のこと。

2　匆惶――あわて急ぐ様子。

3　親馬鹿チャンリン――「親ばかちゃんりん、そば屋の風鈴」と続くきまり文句で、分別なく子供を可愛がる親の様子をからかって言う言葉。

4　女学校――旧制の高等女学校の略。

5　良人――夫に同じ。

6　省線――鉄道行政をつかさどる中央官庁であった鉄道省が管理していた路線の呼び方。

7　歩廊――駅のプラットホーム。

8　あすこ――「あそこ」のくだけた言い方。

9　ねんねこ――「ねんねこ半纏（ばんてん）」の略。子供を背負うときに羽織る、綿入りの丈の短い衣服。

問1　傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 12 ～ 14 。

(ア)　悦に入って　12

① 思い通りにいき得意になって
② 我を忘れるくらい夢中になって
③ 我慢ができないほどおかしくて
④ 本心を見透かされ照れて
⑤ 感情を押し隠し素知らぬふりをして

(イ)　相好を崩していた　13

① なれなれしく振る舞っていた
② 緊張がほぐれ安心していた
③ 好ましい態度をとれずにいた
④ 顔をほころばせ喜んでいた
⑤ 親しみを感じくつろいでいた

(ウ)　すげなさ　14

① 動揺し恥ずかしがる様子
② 改まりかしこまった様子
③ 判断に迷い戸惑う様子
④ 物おじせず堂々とした様子
⑤ 関心がなくひややかな様子

問2 傍線部A「彼は階下に来た自分をいまいましく思っている。」について、彼がこのように思ったのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15 。

① 由紀子の顔を見ながら休んでいたら妻から嫌みを言われてすっかり落ち込んでしまい、仕事への意欲までそがれてしまった自分が情けなくなったため。

② 可愛い子供の声に耐えきれず階下に降りていったところ、妻との会話によって由紀子とのかかわり方も仕事への取り組みも中途半端になっていることに気づかされたため。

③ 仕事が大変なことを理由に家庭内で自分勝手に振る舞ってきたにもかかわらず、由紀子の声を聞いたくらいで階下へ降りてきた様子から本当に忙しいのかを妻に疑われそうになったため。

④ 階下に来たために由紀子が自分になついていないことを改めて思い知らされ、加えてその原因が他の父親たちとは異なる生活習慣にあることを妻に指摘されてしまったため。

⑤ 仕事を早く進めなければならないにもかかわらず、由紀子の面倒を見ることで執筆作業から逃げだそうとしていた自分の弱さを妻に自覚させられたため。

問3　傍線部B「『子供を持って僕は、今まで知らなかった感情を知らされた。痒くても掻けないところを掻かれるみたいですね』」について、このときの彼の心情と様子の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16 。

① 社会的に恵まれた立場にある知り合いの女性作家の優雅な振る舞いに押され、彼女に対して卑屈になりたくないと焦っていたこともあって、普段はあまり使わない言葉を使いながら、自分が感じている以上に何とも言えない子供の愛らしさを強調しようとしている。

② 立派な家柄である女性作家に子供の様子を尋ねられてすっかり舞い上がり、作品には自信がないが子供を思う気持ちではひけを取らないと自負していたこともあって、理屈の通らないたとえになっていることを気にせずに、自分の愛情の深さを説明し続けている。

③ 優美な雰囲気を持った知り合いの女性作家へのあこがれがあり、子供に対する愛情の向け方に共通点を見いだしうれしくなっていたこともあって、大げさな表現を用いて、彼女と同じく自分も子供が好きであるということをはっきりと示そうとしている。

④ 物静かで話を聞いてくれそうな知り合いの女性作家の問いかけをうけ、子供に関しては素直に感情を表現できる自分に喜びを感じていたこともあって、発言が矛盾していることにかまわず、思いがけず実感することになった子供の可愛さを話し続けている。

⑤ 自分と同じく娘のいる知り合いの女性作家であれば子供への強い愛情に共感してくれるだろうと思い、彼女が親馬鹿ぶりを聞きたがっているように見えたこともあって、うまい言い回しが出来ていることを喜びつつ、子供を持つ親としての実感を率直に話している。

問4 傍線部C「彼の思いは、彼の年老いた母親の上に向けられた。」について、このときの彼の内面の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17 。

① 知り合いの女性作家に対する娘の態度について思いをめぐらせているうちに、自分も作家という立場であるがゆえに由紀子に恥ずかしがられるかもしれないことに思いいたり、そうした立場にいたわけでもなかった母親を遠ざけてきた過去を改めて思い返し、取り返しのつかない行為をしてしまったと反省している。

② 知り合いの女性作家の娘が母親から距離を取ろうとする理由についてあれこれと想像するうちに、身勝手な父親である自分を子供がいつか恥ずかしがるだろうと考えるようになり、改めて家庭をかえりみず仕事に没頭してきた自分自身を振り返ってみて、母親に寂しい思いをさせてきたことに気がつき反省している。

③ 知り合いの女性作家とその娘の関係についてあれこれと想像するうちに、由紀子も自分と同じく親を恥ずかしがるかもしれないと考えるようになり、改めて親としての態度を振り返ってみて、世間のことは構わずに子供のために力を注いでくれた母親の姿勢を学ぶべきだったことに気がつき反省している。

④ 知り合いの女性作家やその娘の心境について思いをめぐらせているうちに、由紀子が成長するにつれて父親をしだいに恥ずかしがるかもしれないと考えるようになり、改めて子として自分がとってきた態度を思い返してみて、これまで母親をまるで気遣ってこなかったことに気がつき反省している。

⑤ 知り合いの女性作家とその娘のことをあれこれと想像するうちに、子供が親を恥ずかしがることが父親であるか母親であるかを問わず繰り返されてきたことに思いいたり、自分も深い考えもなしに母親を平凡だと決めつけ遠ざけ続けてきた過去を改めて思い返し、大人げない態度であったと反省している。

問5 傍線部D「家の平和が、彼には何か哀しい位だった。」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18 。

① 積極的に家族とかかわろうと考え始めていた彼は、何も心配せずに暮らす家族の様子を垣根越しに見ることになる。これまでの態度を悔い改めようという彼の決意を知ることもなくのどかに過ごす様子を見て、しみじみと心を打たれ、家族への思いも募って切なくなっている。

② 家族のために何かをしてやりたいと思っていた彼は、普段目にしていた姿とは異なった由紀子や家族の様子を垣根越しに見ることになる。か弱いもの同士が寄り添いながら静かに暮らしている様子を見て、将来への言い知れない不安を感じ、いたたまれなくなっている。

③ 今後は家族の要望も踏まえて行動しようと決心した彼は、あまりに平穏に過ごしている家族の様子を垣根越しに見ることになる。父親がいない状況を何とも感じていない様子を見て、自分の存在がそれほど大きなものでないことに気がつき、寂しくなっている。

④ 家族との関係を冷静に見つめ直そうと思っていた彼は、落ち着いてはいるがどこかはかなさも感じさせる家族の様子を垣根越しに見ることになる。父親の帰りを待ちわびている様子を見て、いたらない自分が家族から信頼されていることを初めて実感し、胸がいっぱいになっている。

⑤ 家族を優先しながら生活を組み立て直そうと思いを新たにしていた彼は、いつも以上に静穏な家族の様子を垣根越しに見ることになる。穏やかで落ち着いた様子を見て、今後家族に幸福が訪れるかもしれないと感じつつも自分が役立っていないことを思い、落胆している。

問6　この文章の表現に関する説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 19 ・ 20 。

① 49行目までは、彼と由紀子との会話が短いやりとりでテンポ良く進んでいくのに対し、彼と妻との会話はそれぞれが言いたいことを言い、間を取りながら進む。会話の進め方で子供の世界と大人の世界が書き分けられ、ある一日の何げない日常の風景に奥行きが与えられている。

② 1行目から64行目にかけては、家族に対する彼の心情が、短文を用い簡潔に表現されているが、88行目から105行目にかけては、家族についての内省を重ねる彼の心の動きが、カギ括弧を活用したり、「……」「――」を用いたりしながら、技巧的に表現されている。

③ 70行目から87行目にかけて「女流作家と親しいとある作家から聞いた話」が本文に挿入されている。この話は伝聞でありながら、彼がその場に居たかのように会話と情景が再現されている。これによって、自分と他人の記憶の区別がつかないほど、この回想が彼にとって重要であることが表現されている。

④ 2行目の「あやしたくなる」のように、49行目までは文末に現在形が多用され、彼の由紀子に対する言動が、日々同じように繰り返されていることが強調されている。これに対して50行目からは「一緒になった」のように過去形が多用され、それ以降の出来事が一回的で取り返しのつかないものであることが強調されている。

⑤ 108行目の「縁側に座蒲団を出して」から114行目の「寝ているのである」にかけては、縁側の全体的な光景から、まず母親の背中の由紀子に描写の焦点が移り、次に由紀子のセーターを編んでいる妻、居眠りをしている母親と由紀子に焦点が移っていく。このような焦点の移動を通して家族の様子が細部にわたり表現されている。

⑥ 2行目の「ソワソワ」のようなカタカナ表記の擬態語は、登場人物の行動や態度に関する表現になっているのに対し、108行目の「ちん」のようなひらがな表記の擬態語は、登場人物の感情や意思に関する表現になっている。このように、擬態語についてはカタカナ・ひらがな表記の効果的な書き分けが行われている。

第3問 次の文章は『うつほ物語』の一節である。入内を控えたあて宮のことをあきらめきれず、何とかして最後に自分の気持ちを訴えたい源宰相は、あて宮づきの女房である兵衛の君を説き伏せて、手紙の仲介役を引き受けさせようとしている。以下の文章は、それに続くものである。これを読んで、後の問い（**問1**～**6**）に答えよ。（配点　50）

兵衛、「わりなきことになむ侍る。年ごろかくのみ聞こえたまふを、さもありぬべき御気色の見えば、必ず身はいたづらになるともと思ひ **a** たまへしかど、思ひかくべくもあらず、いと恐ろしければ、すべき方なく侍り。もしも隙侍らば、今かくなむと聞こえさせむ」。宰相喜びて、御文書きたまふ。

「今は聞こえさせじと思ひたまふれど、ほどもなし（注1）とか言ふ **b** なる身より思ひたまへあまりぬるを、やる方なければなむ。かういみじき目を見たまへあまりぬるよりは、死ぬるものにもがなと思ひたまふれど、それもかくながらは、**X** 道なき心地なむする」

とて、

「思ふこと難くて死なば死出の山関とやならむ塞がれる胸
いかで夢の中にも、かくなむと聞こえさせて(ア)やみぬるものにもがな。あが君や、いかにせむ」

とて、兵衛の君に、蒔絵（注2）の置口の箱一具に、綾、絹たたみ入れ、夏の装束、綾襲（注3）にて入れて、かく言ひて取らせたまふ。

A 燃えさかる思ひこめたる身を熱み脱げる衣をあつしとな見そ

とて取らせたまふ。兵衛、とかく聞こえて、参上りて、あて宮にこの御文を奉る。見たまひてものものたまはず。兵衛、「いみじく惑ひ焦られたまふめるを、こたみばかりただ一行聞こえたまへ。思ひ死にに死にたまひなば、恐ろしくもこそ」と聞こゆれど、聞き入れたまはず。

源宰相、心魂を砕きて、思ひ嘆くこと限りなくて、兵衛の君を呼びてかく聞こえたまふ。

「**B**　わくがごともの思ふ人の胸の火に落つる涙のたぎりますかな
今は聞こえさすべき方こそなけれ」

とて、兵衛の君に、をかしげなる沈(注4)の箱一具に、黄金一箱づつ入れて、取らせたまふとて、

C　年を経て頼む人だにつれなきに箱の黄金も何にかはせむ

兵衛、

D　数知れる黄金は我も何せむにはかりなしてふ恋をこそ思へ

とて、賜はらで、参上りて、あて宮にこの御文奉るとて、「なほこの度ばかり一行聞こえさせたまへ。こたびさへのたまはずは、やがて死ぬべしと、惑ひこがc〕れたまふを見たまふれば、いといみじくなむ」。あて宮、久しく思しわづらひて、かの文の端に、ただかく書きたまへり。

E　涙をばいかが頼まむまた人の目にさへ浮きて見ゆとこそ聞け

と書きつけたまへり。宰相喜びたまふこと限りなし。立ち返りて聞こえたまへり。

「**F**　年を経て嘆かぬ人は浮かばぬをまたかかる目はたれか見るらむ
(イ)あらじとなむ覚ゆる」

とて、奉れたまふ。「こたびばかりとのたまはすれば、隙をうかがひて、おぼろけならず聞こえてこそ御覧ぜさせつれ。今はすべき方もなし。かけてもな頼ませそよ。(ウ)思し定めぬ時だにあるものを。今は世は逆さまになるとも、思ほし返すべきd〕にもあらず。身を捨ててと思ほすとも、簀子(注5)には巡りて、君だち、御帳の巡りには、宮(注6)、おとどよりはじめたてまつりて、御方々(注7)隙なくおはしますには、飛ぶ鳥といふとも翔りたまふべくもあらず。見たてまつれば、いみじくいとほしと思ひたまふれど、たばかり聞こゆべき方もなくなむ。**Y**なかなかに、かかることを何に承り始めけむ」。宰相、死に入りて息もせず。頂より黒き煙立ちて、青くなり赤くなりて、ただ息のみ通ふ。兵衛、涙を流して上りぬ。

（注）

1　ほどもなし――人の命は短い、の意。

2　蒔絵の置口の箱一具――漆と金銀で絵を描き、へりを金銀などで縁取った贅沢（ぜいたく）な箱一式。

3　綾襲――高価な綾織物を何枚も重ねて着る豪華な衣装。

4　沈の箱――沈香という貴重な香木で作った箱。

5　君だち――あて宮の兄弟。

6　宮、おとど――あて宮の母と父。

7　御方々――あて宮の姉たち。

問1　傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 21 ～ 23 。

(ア)　やみぬるものにもがな　21

① 死んでしまいたいものだ
② 病に伏せった方がよいのに
③ 私の人生も終わればよいのに
④ この恋が終わってほしい
⑤ 何もかもやめてしまいたい

(イ)　あらじとなむ覚ゆる　22

① 少しも我慢できそうにない気がする
② とても生きていられないように感じる
③ そういう人はいないだろうと思われる
④ このままでいられないだろうと感じる
⑤ そんな目には遭うまいと思われる

(ウ)　思し定めぬ時だにあるものを　23

① せめて決心なさる前に仲介があればよかったのに
② お心をお決めにならない時なら仲介もできるのに
③ お気持ちが決まらない時にも仲介しているのに
④ お決めになる前だって仲介するのは難しいのに
⑤ 決心なさった時でさえ仲介することがあったのに

問2　波線部a～dの文法的説明の組合せとして正しいものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24 。

① a 謙譲の補助動詞　b 伝聞の助動詞　c 動詞の活用語尾　d 断定の助動詞

② a 尊敬の補助動詞　b 断定の助動詞　c 自発の助動詞　d 格助詞

③ a 謙譲の補助動詞　b 断定の助動詞　c 受身の助動詞　d 格助詞

④ a 尊敬の補助動詞　b 伝聞の助動詞　c 動詞の活用語尾　d 格助詞

⑤ a 謙譲の補助動詞　b 伝聞の助動詞　c 自発の助動詞　d 断定の助動詞

問3　傍線部X「道なき心地なむする」とあるが、源宰相はどのような思いを訴えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25 。

① あて宮への思いに胸を塞がれているので、あの世への道がせき止められて死ねず、苦しい思いを抱いたまま生きていくしかないと訴えている。

② あて宮への思いを断念してあの世への道をたどるにしても、この思いを誰かに打ち明けないままでは、未練を断ち切れないと訴えている。

③ あて宮への思いを叶えることができず、胸が塞がるほど苦しいので、今後どうやって生きていけばよいか、その術がわからないと訴えている。

④ あて宮への思いは強く、入内する人に恋するのは世の道理に反するとわかってはいるが、死ぬほどに慕う胸の思いを抑えきれないと訴えている。

⑤ あて宮への思いを伝えられないままでは、この胸にわだかまっている思いであの世への道が閉ざされてしまい、死ぬに死ねないと訴えている。

問4　本文中の和歌A～C・Fは源宰相の歌、和歌Dは兵衛の君の歌、和歌Eはあて宮の歌である。和歌A～Fに関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26 。

① Aは兵衛の君に対して、燃える恋心のあつさゆえ脱いだ衣装とともに、衣装にこもる私の恋心も受け取ってください、と詠んでいる。Bはあて宮に対して、私の胸に燃える恋の炎の激しさに、落ちる涙はわき返って一瞬で消えてしまいました、と恋の苦しさを訴えている。

② Aは兵衛の君に対して、装束を贈って、あて宮への仲介を頼む私をあつかましいと思わないでください、と詠んでいる。Cも兵衛の君に対して、恋しい人からさえ冷たくされる私には黄金も価値がありません、これを贈るのでぜひあて宮に仲介してください、と懇願している。

③ Bはあて宮に対して、次々と思いがわき上がるように恋い焦がれる私の胸で、落ちる涙は煮え返っています、と激しい恋の苦しみを詠んでいる。Eは源宰相に答えて、涙などは誰の目にも浮かぶものなので、涙にくれるだけでは信用できません、と冷たくあしらっている。

④ Cは兵衛の君に対して、あなたに見放された私には黄金など価値もないので、あなたに贈りましょう、と詠んでいる。Dは源宰相に答えて、黄金もあなたの恋の行方も気がかりですが、これ以上取り次ぐことができないので黄金はいただけません、と遠慮している。

⑤ Eは源宰相に対して、他の女性に対しても流すあなたの涙などあてにできません、私のことをもっと真剣に考えてください、と詠んでいる。Fはあて宮に答えて、長い間嘆いてきた私の目に浮かぶこの涙は、他(ほか)ならぬあなたのための涙です、と思いが通じたことを喜んでいる。

問5　傍線部Y「なかなかに」とあるが、この言葉には兵衛の君のどのような気持ちがこめられているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 27 。

① 源宰相に肩入れして仲介を引き受けてきた一方で、源宰相の気持ちを拒むあて宮に仕える女房としての立場もあり、どちらからも良く思われようとした結果、身動きがとれなくなったことに困惑する気持ち。

② 源宰相に懇願されて手紙を仲介しようとしたが、あて宮の周囲に家族がいてそばにも寄れず、結局手紙を渡せなかったので、何とかなるという中途半端な考えでは、仲介できるわけもなかったと反省する気持ち。

③ 源宰相の一方的で自分勝手な行為にとまどいを感じながらも、仲介するうちに、その一途（いちず）さに対してかえって共感を覚えるようになったのに、自分にできることはもうなくなってしまったと落胆する気持ち。

④ 源宰相の恋を自分の力で成就させてあげたいとの思いから、あて宮との間を仲介したもののうまくいかず、期待を持たせた分、かえって源宰相の心の傷を深める結果に終わり、仲介した自分に失望する気持ち。

⑤ 源宰相の恋は叶うはずがないと思いながらも、あて宮への仲介を引き受けたが、結局どうすることもできず、心苦しい困った立場になってしまったので、最初から引き受けなければよかったと後悔する気持ち。

問6　この文章の表現と内容に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 28 。

① 源宰相の常軌を逸した姿が、兵衛の君に頼み込む前半場面では「死出の山」や「心魂を砕きて」と重々しく表現されるが、最後の場面では戯画的に「黒き煙立ちて、青くなり赤くなりて」兵衛の君にあきれられると描写されるなど、場面に応じて自在に描き分けられている。

② 源宰相の恋心の激烈な様子が、**A**の歌では「燃えさかる思ひこめたる身」、**B**の歌では「わくがごともの思ふ人の胸の火」、最後の場面では「頂より黒き煙立ちて」のように、燃え上がる「火」にかかわる表現をくり返し使うことによって、印象的に表現されている。

③ 源宰相の必死な思いが、兵衛の君に「あが君や、いかにせむ」とすがり、断られると懐柔のために「蒔絵の置口の箱一具」「綾、絹」「綾襲」「沈の箱一具」「黄金一箱づつ」を贈るというように、具体的な会話と贈り物を詳細に描くことで、いきいきと描写されている。

④ 兵衛の君の女房としての未熟さが、源宰相には「もしも隙侍らば」「隙をうかがひて」と同じ弁解をくり返し、あて宮には「こたみばかりただ一行聞こえたまへ」「なほこの度ばかり一行聞こえさせたまへ」とくり返すというように、単調な言動によって、強調されている。

⑤ あて宮の冷淡な人柄が、「思ひ死にに死にたまひなば、恐ろしくもこそ」「やがて死ぬべし」「いといみじくなむ」と大げさな言葉で説得する兵衛の君に対して、「もののたまはず」「聞き入れたまはず」と一貫して拒否し続ける態度を描くことで、浮き彫りにされている。

第4問 清の詩人呉嘉紀は、例年春になると生活費を得るために旅に出ていた。たまたま自宅で過ごしたある年、妻の王氏に頼まれて、毎年自宅に巣をかける燕を「双燕来る」という詩に詠じた。それから数年後、妻が突然死去した。以下は、呉嘉紀が亡妻を思って詠じた「妻の王氏を哭す」という詩と、その詩に自ら補足した文章である。これを読んで、後の問い（**問1**～**7**）に答えよ。（設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。）（配点　50）

雄燕朝銜レ泥　雌燕暮銜レ泥
顚毛稍稍禿（注1）　双影依依偕（注2）（注3）（ア）
恩勤久不レ倦（注4）　類我老夫 Ⅰ
題詩思昨日（注5）　夫東婦坐レ Ⅱ
不レ厭生計 Ⅲ　但求耄年諧（注6）

風光猶似レ昨　梁上倏孤棲（注7）
門庭人跡稀　錦瑟聊自携（注8）

A
故雄語未レ了　故夫亦已啼

斎中巣燕、秋去春来、十有四年。内人曾乞余作詩、為賦

「双燕来」二首。其二首結句云、

簷際春梅又発花　主人今歳未離家。

匹偶但得長如爾　不妨相対鬢毛華。

蓋以余頻年飢駆道路、終願如燕之不相離、以卒余両人暮歯也。今春貍齧雌燕死、其雄悲語空梁、余為涕零如雨。未幾、内人奄然棄世。余棲棲出入、自語自悲、又一雄燕矣。

（呉嘉紀『陋軒詩』による）

（注）

1 顚毛――頭の毛。
2 稍稍――しだいに。
3 依依――慕わしげに。
4 恩勤――父母が子供を育てる愛情や苦労。
5 題詩思昨日――「題詩」は数年前に作った「双燕来る」の詩二首を指す。後文に引かれる「簷際」で始まる四句はその第二首の末四句。「昨日」はその詩を詠んだ当時のことを指す。
6 耄年――老年。
7 梁――はり。家の棟をささえる大きな横木。
8 錦瑟聊自携――妻が愛用していた瑟という楽器を形見として身近に置いていることをいう。
9 内人――妻。
10 簷際――のきば。軒のあたり。
11 匹偶――連れ添う。
12 鬢毛華――耳ぎわの髪の毛が白いこと。
13 頻年――毎年続いて。
14 飢駆二道路一――生活費を得るためにさまざまな場所に旅に出ることをいう。
15 暮歯――晩年。
16 貍――猫。
17 奄然――たちまち。にわかに。
18 棲棲――寂しげに。

問1 波線部(ア)「偕」・(イ)「発」のここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 29 ・ 30 。

(ア)「偕」 29

① 楽しく過ごす
② 一緒にいる
③ 鳴きかわす
④ 飛びまわる
⑤ うなずきあう

(イ)「発」 30

① 散らす
② 開く
③ かざす
④ 贈る
⑤ 手折る

問2 傍線部(1)「曾」・(2)「爾」の読み方として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 31 ・ 32 。

(1)「曾」 31

① あへて
② すでに
③ かつて
④ まさに
⑤ つひに

(2)「爾」 32

① つねの
② いづれの
③ われの
④ なんぢの
⑤ さきの

問3 空欄 Ⅰ ・ Ⅱ ・ Ⅲ に入る語の組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 33 。

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
①	婦ニ	西ニ	債アルヲ
②	婦ニ	内ニ	貧シキヲ
③	妻ニ	西ニ	苦シキヲ
④	妻ニ	内ニ	害セラルルヲ
⑤	人ニ	西ニ	窮スルヲ

問4　傍線部A「故雄語未了　故夫亦已啼」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 34 。

① 残された雄の鳴き声がまだやまないうちに、残された夫ももう涙を流している。
② ことさらに雄は鳴いて鳴き終わらず、だから夫もまだ涙を流し続けている。
③ 昔の雄の鳴き声がまだ終わらないのに、昔の夫もやがて涙を流そうとしている。
④ 年老いた雄は鳴きだしてとまらず、年老いた夫もふたたび涙を流し始める。
⑤ 昔なじみの雄の鳴き声はまだ終わっておらず、だから夫もまた涙を流すだろう。

問5　傍線部B「乞二余作一詩」について、妻が詩を作るように頼んだのはどのような思いからと考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35 。

① 我が家につがいの燕がやって来たのに、夫がそれに全く注意を払おうとしないので、詩を詠じることで燕に関心を持ってもらいたいという思いから。

② その年も燕がやって来て、またこの春は夫と二人で過ごせることがうれしくて、詩を作ってもらうことでその喜びを夫と共有したいという思いから。

③ 仲むつまじい燕の姿に夫婦仲良く過ごす自分たちを重ね合わせ、両者をうまく詩に詠じてもらうことで死後の世界も幸せでありたいという思いから。

④ 燕は忙しそうにあちこち飛びまわっているのに、家で暇を持てあましている夫をかわいそうに思い、退屈しのぎに詩でも作らせようという思いから。

⑤ その年も我が家につがいの燕がやって来たことを喜び、夫が詩を作れば燕にも思いが伝わって、これからもずっと来てくれるだろうという思いから。

問6 傍線部C「終願如燕之不相離、以卒余両人暮歯也」の返り点・送り仮名の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **36** 。

① 終レ願如ニ燕之不ニ相離一、以卒余両人暮歯ナレバ也
願ひを終へて燕の相ひ離れざるがごとくするは、以て卒に余が両人の暮歯なればなり

② 終願下如ニ燕之不ニ相離一、以卒中余両人暮歯上也
終に燕の相ひ離れざるがごとく、以て余が両人の暮歯を卒へんことを願ふなり

③ 終願レ如ニ燕之不ニ相離一、以卒ニ余両人暮歯一也
終に燕の相ひ離れざるがごときを願ひ、以て余が両人の暮歯を卒へしなり

④ 終レ願如レ燕之不ニ相離一、以卒余両人暮歯也
願ひを終へて燕のごとく相ひ離れざるに之き、以て卒に余が両人の暮歯とするなり

⑤ 終願下如レ燕之不ニ相離一、以中卒余両人暮歯上也
終に燕のごとく之きて相ひ離れず、卒かに余が両人の暮歯を以てせんことを願ふなり

問7　傍線部D「又一雄燕矣」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 37 。

① 妻を亡くしてひとり寂しく語っては悲嘆に暮れている自分は、この春に雌燕を失って梁で一羽だけで鳴いている雄燕と同じであることに気づき、私もまた一羽の雄燕なのだと深い悲しみにおそわれている。

② 妻を亡くして話す相手も無いのに独り言を言っている自分は、雌燕を失って一羽だけで騒いでいる雄燕と同じであることに気づき、私も一羽の雄燕に過ぎないと自らをあざけるような気持ちになっている。

③ 妻を亡くしてもう生活のために旅をする必要の無くなった自分は、一羽だけで梁に止まっている雄燕と同じであることに気づき、私もまたあの雄燕のようにひっそりと生きるのかとあきらめを感じている。

④ 妻を亡くしてひとりで生活していかなければならない自分は、一羽だけで忙しく飛びまわっている雄燕と同じであることに気づき、私もまた雄燕とともに悲しみを乗り越えて生きていこうと決意している。

⑤ 妻を亡くしてどうして良いか分からずにうろたえている自分は、一羽だけでせわしく巣を出入りしている雄燕と同じであることに気づき、私もあの一羽の雄燕のようだと自分の姿をあさましく思っている。